

追悼



撮影：齋藤さだむ

高山正喜久先生を偲んで

筑波大学名誉教授 三田村峻右

高山正喜久先生が、2017（平成 29）年 2 月 10 日逝去されました。享年 99。ここに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

履歴に記されているとおり、高山先生は数多くの学校に学ばれた。ご本人の言葉によれば、「本を読むのが苦手だったので、耳学問のために学校に行ったようなものです」とのことであるが、学校好きだったようだ。何しろ、教職の場としても小・中・高校、大学、大学院ばかりか、一時期聾学校の校長を務め、退官後には桑沢デザイン研究所々長、さらには幼児教育にまでと、教育課程を総なめにしておられるのだから。

その教育の在り方は、「自分ではやったことのないできないことを、課題として考え、学生に押し付けた。従って、教えられない。学生が思いがけなく素晴らしい作品を提出してくれた」と言われる。

実際の課題は、マッチの軸によって立方体の枠を組み立てる、竹ひごと糸を用いてテンション構造を構成する、羊羹を二等分する、粘土の塊に穴を開けるといったユニークなもので、学生は頭の体操に悩まされたのである。これらは安保騒動に明け暮れていた頃、「立体構成入門」と題して『美術手帖』に連載され、1965（昭和 40）年に『立体構成の基礎』として出版された。この本はその後何度か改訂され、造形教育の基本的な教科書となった。全く独力で「立体構成」という新しい分野を拓かれた功績は極めて高く評価されよう。

高橋正人先生が始められた「構成学」が色彩を主とした「平面構成」であり、美的センスの涵養を通じてヴィジュアル・デザインの分野で広く影響をもたらしたのに対し、高山先生の「立体構成」はデザインの基礎とは言いながら、美的感性はほ

んどお構いなし、わずかにパッケージの分野で取り入れられた程度で実質的な効用は見られなかったのではと思われる。

だが後に、マッチ棒の構成がコンセプチャル・アートのソル・レウィッツの《不完全なオープン・キューブ》を先取りした課題であり、羊羹の回転切りがそのまま堀内正和の《立方体の二等分》などの先駆けであったことに驚かされた。桑沢で学んだ戸村浩の『基本形体の構造』に先生の影響が認められる他にも、いくつか「立体構成」の展開とおぼしき作品が見受けられる。デザインよりもアートの分野で「立体」は関心を持たれていたのである。

高山先生の洒落でユニークなお話は人気が高く、あちこちからお呼びがかかって全国を講演・講義して廻られた。国内のみならず台湾にも幾度も招かれ、H. リード、E. W. アイスナーに次ぐ戦後の美術教育者として評価され、それは現在も構成に引き継がれている。

後年、筑波大学開設に当たっては初代芸術学系長として運営に携われ、また構成を基に新たに展開された総合造形、視覚伝達デザインの 3 コースのまとめ役として尽力された。その混乱の時期、コースの教官が寄り集まって夜おそくまで教育内容等について協議したことは忘れがたい。筑波での在勤は数年に過ぎなかったが、その間、学年末には旅費を寄せ集めて、先生の生地岡山そして佐渡、神戸などにみんなで宿泊研修旅行に出かけたりしたことも懐かしい思い出である。

本学会では 1959（昭和 34）年から長年教育部会を中心に活動され、後年は「Basic Design における発想法の研究」を継続して発表されていた。学会最多の発表回数だったと聞く。

晩年、発想法の原稿がまとまり子供の城を介して出版の準備を進めていると言っておられたが、こどもの城の閉館によって立ち消えになったのだろうか。おそらく膨大な原稿・資料が遺されたであろう。いつか、日の目を見られるよう仰望する。

「高山先生に感謝する会」が、教育部会のお世話で 10 月 21 日に美術出版社 1 階レストランで催される。人々の想いの詰まった感謝と追悼の集いとなるであろう。合掌。

ご経歴

1918 年（大 7）岡山県生まれ
 1937 年（昭 12）岡山県師範学校卒業、宇野小学校勤務
 1938 年（昭 13）海軍短期現役（1 年）
 1943 年（昭 18）東京高等師範学校藝能科卒業、付属小・中学校教諭
 1951 年（昭 25）東京文理科大学文学部心理学科卒業
 東京教育大学付属中・高等学校教諭
 1955 年（昭 30）造形教育センター設立に尽力
 1956 年（昭 31）早稲田大学第二理工学部建築学科卒業
 1957 年（昭 32）桑沢デザイン研究所非常勤講師
 1965 年（昭 40）『立体構成の基礎』（美術出版社）刊行
 1972 年（昭 47）東京教育大学教育学部芸術学科工芸専攻助教授
 1973 年（昭 48）東京教育大学教育学部芸術学科構成専攻教授
 1975 年（昭 50）筑波大学芸術学系教授、芸術学系長併任
 1978 年（昭 53）筑波大学付属盲学校校長併任
 1981 年（昭 56）筑波大学定年退官、桑沢デザイン研究所所長（～1987）
 1989 年（平 元）『デザイン教育大事典』監修（鳳山社）
 1991 年（平 3）筑波大学名誉教授
 2001 年（平 13）日本デザイン学会特別賞
 2017 年（平 29）逝去

2017 年度春季研究発表大会報告

大会実行委員長 岡崎 章

第 64 春季研究発表大会のテーマは、「慮るデザイン」としました。デザインするうえで人の心を慮（おもんばか）ることは当然のことながら、それは「快のイメージを増幅」する目的が殆どでした。しかし、「負のイメージを軽減」する目的に対してもデザインはもっと目を向けなければならないと考えたからです。またそれは、快のイメージの増幅のための新しい視点になると思ったからです。今まで経験したことがなかったような災害を、誰が経験してもおかしくない現在、被災者の心を推し量りデザインで軽減することは、医療や看護と同様に重要なはずですが。一方、「快のイメージを増幅」することについてもオリンピックを控えた昨今、海外から来日する人達への「おもてなし」を考えたとき、「慮るデザイン」とは何かを考え直すことも重要になるのです。

しかし、いずれもどう慮れば良いのかを考えると、人の心は曖昧であるがゆえに立ち止まってしまうのも事実です。そこで、慮るデザインとは何なのかを正面切って考える場にしたいと考えたのです。加えてこれまで対象としなかった領域に対して慮るデザインを見いだす機会にしたいと思ったのです。

本研究発表大会は、拓殖大学文京キャンパスにおいて6月30日（金）～7月2日（日）までの3日間開催し、参加者は、569名でした。

6月30日（金）は、基調講演「地域と企業、そして社会をつなぐデザイン」が若杉浩一氏（パワープレイス株式会社シニアディレクター）によって行われました（14：30～16：00）。

若杉氏は、デザインとは未来を豊かにする仕事だと思えば企業のデザインを懸命にやってきたもののその先には経済しかなく、その経済のためにだけに仕事をしていいのだろうかという疑問を抱いたことを先ず語られました。そこから自分たちの故郷はどうなるのか？デザインの未来はどうなるのか？という思いが「日本全国スギダラケ倶楽部」としての活動となり、16年間、2,000名もの人の共感を呼び、結果、デザインに繋がっている、という内容をユーモアたっぷりにお話し頂きました。会場は笑いの渦と共に共感を得る場となりました。なお、本基調講演は一般公開されました。

基調講演の後、研究部会ミーティング（16：10～17：00）が行われました。研究部会ミーティングの時間を設けたのは今回が初めての試みでした。今回実施されたのは、子どものためのデザイン部会、情報デザイン部会でした。

部会ミーティングの後、日本橋に移動し、エクスカージョン「神田川～日本橋ぐるり周遊クルーズ」（18：00～19：30）を実施しました。雨で中止が危惧されていましたが、雲も晴れ間

を見せ、快適なクルーズ「日本橋のりば～江戸橋～隅田川（永代橋・清洲橋・両国橋）～神田川（浅草橋・万世橋・聖橋）～日本橋川～一ツ橋～常盤橋～日本橋のりば」が堪能できました。参加者は、24名でした。

7月1日（土）は、口頭発表（9：00～11：00、12：50～14：50）、ポスターセッション（11：00～12：00）において様々な分野から発表が行われました。オーガナイズドセッション（15：00～17：00）は、「慮るデザイン」と「デザイン研究における記述方法としての視覚化」の2つが並行して開催されました。

オーガナイズドセッションA「慮るデザイン」では、以下の4つの各分野の専門家のお話の中からどのように人の心を捉えようとしているのかを串刺しして見ることで、デザインに活かす知見とする議論がなされました。

①ロボティクス（ロボットという超人的な存在をイメージしがちだが、「生きている限り自立した生活ができる」ことを保証するためのロボットを考えるとどうということなのか）。②義肢装具のリハビリテーション学（義肢補装具を切断者に合わせるために、切断者の痛みや不安感を払拭するために切断者の意見を聞きくが、それが必ずしも最適解にはならないとはどうということなのか）。③家族看護学（家族が病気になれば、病人へ心が一方的に向かうなど家族間で様々な問題が生じるが、それを修復し、より良い方向へと導く家族看護学の考え方とはどうものなのか）。④感性デザイン学（感性評価のためのデザインは、既存の評価法と異なり曖昧な感性を曖昧なまま評価するところにある、とはどう言うことなのか）。



オーガナイズドセッションB「デザイン研究における記述方法としての視覚化」では、従来の自然科学的研究スタイルを踏



学会長による開会の挨拶



若杉氏による基調講演



会場の拓殖大学文京キャンパス



エクスカージョン
【神田川～日本橋ぐるり周遊クルーズ】

襲するだけでは既存の研究手法や成果の提示方法としてはまだ不十分という問題提起を出発点として、情報デザインという市民のあらゆる生活を横断する実践分野を対象にデザイン研究の方法とデザイン研究者の役割を再定義がなされました。

UCD (User Centered Design) の重要性が謳われて久しいものの、ユーザーに対する研究ほどにデザイナーの営みに対する研究が進んでいるとは言い難く、さらに、ある瞬間高い評価を得たデザインも時間の経過とともに消滅します。そのデザインが社会に受け入れられてたことで社会も変化し、社会の変化の方向に誰が責任を取るかをデザイナーに求めることは困難です。デザイン研究の対象は無限に挙げられるものの問題はその研究方法と成果の評価にあるとし、どうしたらデザインできるようになるのか、どうなればデザインできたと言えるのか、そのデザインの価値を誰がどう評価すれば良いデザインなのか、これらの成果から何を学べば「デザインできる」という知や技を次世代に引き継いでいけるのかという問いに対して解を求められました。その議論の取り掛かりとしてデザインプロジェクトのプロセスや成果の記録・記述方法に焦点を当て、デザイン研究の記述方法について検討されました。

懇親会 (17:15 ~ 19:00) は、E館9Fの展望ラウンジで実施しました。3方向から都心を一望できる空間に横浜ビールで親睦を深め、また、新たな人との出会いが新しい研究へと誘ってくれたことと思っています。

7月2日(日)は、口頭発表(9:00 ~ 11:00、12:50 ~ 14:10)、ポスターセッション(11:00 ~ 12:00)において、前日同様様々な分野から発表が行われました。オーガナイズドセッション(14:20 ~ 16:20)として「これからの仕組み—国産木材とデザイン」と「キッズデザイナー—子どもの安全と傷害予防に向けた製品の研究開発」の2つが並行して開催されました。

オーガナイズドセッションC「これからの仕組み—国産木材とデザイン」では、デザインを中心に国産木材に関わりつくる方々の発表・討論を通して、私達が今日からできることや明日からすべきことなどを考えるとともに、これからの生活や社会などの仕組みの手掛かりを目指すための議論が行われました。国産木材は、生活財はもちろん風土に根差した文化や景観をかたちづくるなど私達の日常をつくってきたものの、利用の減少や森林の荒廃などと言われて久しいこと。戦後の不足期から輸入自由化などを経て工業化などとともに姿を消していき、1980年をピークとした価格は低下し、森林・林業に携わる関係者の減少などが続いていること。さらに現在は、戦後に植林した杉や檜などが需要期に入るなか大きな転換期に入っており、デザインなど諸分野からの貢献が求められていること。それは、例えば生産地の声などを聞くと地域資源としての商品開

発などから産直住宅、街づくりなど様々でデザインの幅広い専門性とそれらの総合性にあること。人やモノ、場、時、コトなどを関係付ける環境デザインの方法論や計画論に通じることが示され、国産木材からデザインを考えることは、これからの私達の生活や社会を考えることにつながるのではないかという視点で議論されました。

オーガナイズドセッションD「キッズデザイナー—子どもの安全と傷害予防に向けた製品の研究開発」では、消防庁+医師(傷害事故データの提示)⇒産総研(分析・研究)⇒デザイナー(製品や環境、社会に対して解決策を再現)⇒よりよい社会の実現を目指すための議論がなされました。子どもを取り巻く環境は日々変化しており、新しい空間や製品が生まれる度に新しい危険が生まれる可能性があること。しかし、人間が造った環境や製品によって引き起こされた事故ならば人間によって解決できるはずであり、デザイナーや開発者はどんな製品や環境においても必ず子供の安全に対する配慮をしなければならないことが示されました。(公社)日本インダストリアルデザイナー協会(JIDA)のセンター委員会の一つであるスタンダード委員会・キッズデザイン部会では、産総研、小児科医の山中医師、東京消防庁と協働し、子どもの傷害事故を未然に防ぐための製品や環境づくりの研究の取り組みをされており、それに



オーガナイズドセッション A



オーガナイズドセッション B



懇親会における開催校デザイン学科長の挨拶



オーガナイズドセッション C



オーガナイズドセッション D

つて紹介されました。自転車による事故が多いのは容易に想像がつきますが、浴槽やミニトマトで毎年何人もの子どもが命を落としていることはあまり知られていません。ミニトマトやぶどうは、丸ごと食べさせると喉に詰まり死亡に至ることがあり、このような悲劇を繰り返さないためには、まずこのような実態を広く周知させること、そして事故を予防するための道具の開発が重要であるという考えから、ミニトマトやぶどうを手軽に小さくカットする道具の開発に2年以上かけて取り組んできた研究の過程と成果を例に議論がなされました。

企業展示は、株式会社 Too、株式会社 LDF、株式会社エーアンドエーボックス、有限会社つばさ洋書、株式会社ホロンクリエイト、ダイナコムウェア株式会社、公益社団法人 日本インダストリアルデザイナー協会の7件でした。

末筆ですが、参加頂きました皆様、開催にあたってご協力頂いた皆様に感謝の意を表すると共に会員の皆様の方々の益々のご発展を祈念し、開催報告といたします。

2017 年度総会報告

本部事務局

2017年6月30日(金)、拓殖大学文教キャンパス E 館において、第64回総会が開催されました。司会進行は佐藤弘喜本部事務局長が行いました。総会に先立ち司会から、今年度より一般社団法人としての総会となることによる変更点の説明がありました。平成28年9月30日に一般社団法人日本デザイン学会が設立され、平成29年3月31日で任意団体としての日本デザイン学会が解散していることから、任意団体の平成28年度の活動報告をした後に、一般社団法人としての報告、決算、計画などの議事を行う手順となる旨が説明されました。

はじめに、松岡由幸会長より挨拶と活動方針の説明がありました。2017年度は学会の研究・教育基盤の向上、対象領域の拡大、他団体との連携強化の三つを基本施策として推進していきたいとの方針が示されました。次に、任意団体日本デザイン学会の平成28年度活動報告が國澤好衛副会長から説明されました。また平成28年度決算報告が小野健太本部副事務局長により説明されました。

続いて一般社団法人日本デザイン学会の総会に移りました。司会より、議決権を持つ代議員の出席者数が会場出席者約24名、委任状出席者が55名(定数135名)で、過半数により総会が成立することが報告されました。次に総会の議事録署名人2名を会場から募り、國澤好衛理事と加藤健郎理事が担当することを決定した後に議事に入りました。議事は松岡由幸会長を

住所不明で戻ってくる郵便物が
増えております。

住所変更は確実にお願いします。

届出は文書にてお願いします。

転居される方は、FAXまたは

綴じ込みの「入会届け」に

朱書きで「変更届け」と書き添えて、
事務局までご連絡ください。

ホームページ

http://jssd.jp/files/change_regular.pdfにも

様式が掲載されておりますので

ご利用ください。

退会等の届出も必ず文書にて

お願いします。

本部事務局

議長として進行しました。

第1号議案として2016年度事業報告が國澤好衛副会長から説明され、会場からの質疑応答を経て議決の結果、承認されました。第2号議案の2016年度収支決算報告は小野健太本部副事務局長より説明され、それに対し山中・生田目監査から監査報告がなされました。その後、会場からの質疑応答を経て議決の結果、承認されました。引き続き、小林昭世副会長による第3号議案の2017年度事業計画、佐藤弘喜本部事務局長による第4号議案の2017年度収支予算案が説明され、それぞれ審議の結果、議決されました。なお、議案の詳細については会報末に総会資料を掲載いたしましたので、ご参照下さい。

最後に、新たな名誉会員として井上勝雄会員（100号）に名誉会員証の贈呈が行われました。



写真1: 松岡由幸会長による活動方針説明



写真2: 國澤好衛副会長による平成28年度活動報告



写真3: 小林昭世副会長による2017年度事業計画



写真4: 井上勝雄会員への名誉会員証贈呈

2018年度日本デザイン学会春季企画大会のお知らせ

2018年度日本デザイン学会春季企画大会は、大阪市で開催します。

会期：2018年6月22日（金）から6月24日（日）

会場：大阪工業大学梅田キャンパス

献本御礼

◆機関誌

TAMABI News 73、2016年、多摩美術大学

TAMABI News 74、2016年、多摩美術大学

自動引き落とし手続きのお願い

当学会では、会費の自動引き落としが義務付けられております。すでに、半数以上の会員の方にご利用いただいておりますが、まだ登録がお済でない会員の方は、登録手続きをされますよう、お願い申し上げます。また、口座引き落とし依頼書がお手元にない方は、本部事務局へご請求ください。

本部事務局

デザイン理論 70 号、2017 年、意匠学会
JAGDA 学生グランプリ、2017 年、日本グラフィックデザイン
ナー協会

会員の移動

◆ 2017 年度 2 回運営委員会確認 2017.09.09

新入会

正会員 16 名（内海外会員 1 名）

阿野 晃秀 荒巻 大樹 江本 聞夫 柴田 吉隆
島貫 陽 高橋 一誠 中田 士郎 永野 佳孝
西村 美香 服部 元 濱川 和洋 森 豊史
山口 隆 山崎 宗世 渡辺 隆行

Tumurkhaduur Uulen

学生会員 6 名（内海外会員 3 名）

勝部 里菜 北野 清晃 佐藤真利恵 張 丹荷
張 瑩 Huang, Shi-Mei

退会

正会員 5 名（内海外会員 1 名）

奥山 健二 玉木 伸秀 寺 朱美 山崎 堯右
洪 正杓

学生会員 7 名（内海外会員 1 名）

今村 文弥 岩田祐佳梨 岡崎あかね 高橋 侑里
土田 佳歩 矢口真理子 Chen Ya Wen

賛助会員 1 件

(株) マーケットエン